学校給食だより　秋田っ子給食　NO－90

公益財団法人　秋田県学校給食会

稲川中のお菓子、大人気

特産品活用、販売会に列

大勢の来場者でにぎわったオリジナル菓子の販売会

湯沢市の稲川中学校（富谷祥彦校長、137 人）の生徒が地元の特産品を使って開発したオリジナル菓子の販売会が 27 日、同校など市内外 4 カ所で開かれた。午前 10 時の販売開始とともに地域住民らが次々と購入、用意した商品が売り切れる盛況だった。

生徒が考案したのは駒形りんごを使ったタルトやクレープ、稲庭うどんの切り落としのスナックなど 11 種類。市内企業の協力を得て商品化した。1 点 150～550 円で販売し、接客や会計も生徒が担った。

同校では体育館に売り場を設け、1 商品当たり 7～120 点を用意。来場者は次々とトレーに商品を載せ、5 分ほどで売り切れる菓子もあるなど約 30 分で完売した。他の 3 カ所でも 1 時間ほどで売り切った。

同校は昨年度から、生徒の起業家精神や地域活性化への意識を育もうと総合的な学習の授業で、「ｉＮＡゼミ」の名称で特産品を活用した商品開発に取り組んできた。

本年度は地域を巻き込み持続性のある活動に発展させようと、株式会社形式の組織「稲川カンパニー」を発足。1 口 500 円の株券を発行して原資に当てたほか、総務、経理、商品開発、販売促進の 4 部門に分かれて検討を重ねてきた。12 月 8 日に総会を開き、本年度の活動をまとめる。

販売会でケーキ類の売り場を担当した小野寺木乃花さん（3 年）は「どうすれば喜んでもらえる商品を作れるかを考えて活動した。将来は調理に関する道に進みたいので学んだことを生かしたい」と話した。

稲川カンパニーでＣＥＯ（最高経営責任者）を務めた松浦凜太郎さん（同）は「稲川地域以外の人にも商品を買ってもらえ、活性化に貢献するという目的をある程度は果たせた。購入してもらえたのは生徒それぞれが役割を果たした結果」と総括。「卒業後も地元の役に立てることを考えていきたい」と語った。（小林智彦）

（令和 4 年 11 月 28 日（月）秋田魁新聞より一部抜粋）